

# 花の歌

## 歳時記

前田康子

暖かな陽が射し始める頃、縁側がいいなあと思う。縁側から脚を垂らしてまだ地面に届かなかった頃の時間にふと戻る。

縁側で、祖母が前掛け一杯、土筆つづしを摘んできて、袴はかまを取っていた。どこで摘んだのか、危ない所らしく教えてくれない。玉子はあつたかな、などと言いながら、祖母はせっせと手を休めずに動かす。お昼には、ほろ苦い土筆の玉子とじがご飯とともに出てきた。

縁側の下には、夏に誰かが捨てたサイダーのビンや、アイスキャンデーの棒、片方だけになったぞうりが落ちていた。啓蟄けいちつも過ぎれば、蟻あみもそろそろ出てくる。縁側の下には決まってアリジゴクなんかがいる。こわごわ覗のぞいていたら、真っ白い蛇がすうっと横切って行った。

慌あわてて祖母に報告すると、「あれは家の守り神さんよ」と言う。そういえば、蟹かにのように大きな蜘蛛くもが出て、従姉妹いとこ達が泣いていたときも祖母はそう言った。



絵・春ラン／小柳吉次



## 満作

花をよく知らなかった頃は、花屋の店先に、チューリップや色とりどりの暖かな色の花が並び始めただけで、嬉しくなったものだ。

### まんさく 満作

花を見るようになってから、三月は木の花が順番に咲く時期だと知った。満作、山茱萸、三桠、連翹、キブシ、土佐水木など、木の黄色い花々はひっそりと咲いて、春の訪れを知らせる。

なかでも満作は素朴な感じのする花で、枝一杯に細い花びらの花がつくと、ちらちらと星が光って音を出しているような光景である。

### 春山の日向の雪にかけしつゆめよりあはく万作咲けり

結城哀草果、まほら

満作を写真に撮ったことがあるが、肉眼で見た感じとは違う印象になった。一つずつはひよろひよろとした花で、遠くから見ると、木全体がふわふわとした感じになる。「ゆめよりあはく」は本当にその通りである。

### 目は人の肌を撫でる風もまた然れやさびしまんさくの花

岡部桂一郎

まだ春一番が吹いてない頃の風であろう。満作の花を散らすことなく、やさしく撫でて過ぎて行った。

## オオイヌノフグリ

今は、れんげがあまり咲いていないから、子供に春が来たことを教える花は、たんぽぽか、オオイヌノフグリの花である。すっかりおなじみの花だけれど、もともとはヨーロッパの花である。

ふぐりという言葉の意味がわからずに幼い頃憶えたが、この名前を変えようとした学者がいたらしい。牧野富太郎氏は、それに対して「イヌノフグリ、この名前おいにけつこう。」と書いている。

イヌフグリとオオイヌノフグリは別の花であるが、ここではすべてオオイヌノフグリであると解釈した。

犬のふぐりの細かき花にかこまれて小屋から一歩も出られない

山崎方代「こおろぎ」

オオイヌノフグリは摘むと、ほろりと花が落ちてしまうので、持って帰って飾ることも難しい。それでもあの色が道にあると手伸ばしたくなる。小屋の出口をふさいでしまった花を思うやさしい一首。



オオイヌノフグリ

いの一番にオホイヌノフグリの咲くところ  
堆肥場の辺と人に知らゆな

宮原望子「これやこの」

作者の散歩コースだろうか。毎年、咲いている場所をおぼえていて詠んでいるような歌。オオイヌノフグリはかたまつて、土手やあぜ道を縁取るように咲いている。「星の瞳」という異名があるが、昼間はぱちつと開き、夜には閉じてしまう花である。

いぬふぐりはこべちしぱり春の野をおほ  
ふこまかき花のかずかず

久我田鶴子「短歌」平成六年二月号

はこべは、春の七草で、白く小さな花。暖かければ年中咲いている。ジシバリはたんぽぽに似た黄色い花。青、白、黄色、そして葉の緑の色が春の風の中に揺れ合っている。そんな野原に一日中座っていたい日がある。

蛇、とかげまだ這ひ出でぬ草土手にあぬ  
微塵なる犬ふぐりの花

高野公彦「水行」

夏が来ると蚊に刺されたり、蟬の音がうるさいなあと思うことがあるのに、冬に蟻すらもいなくなると、不思議に寂しい気持ちになる。オオイヌノフグリが咲いて地面も暖かくなってきた。生き物よ早く出ておいで。

## スミレ

堇はとても強い花である。落ちた種を蟻が運んでいくため、アスファルトの細い隙間に咲いていたりする。踏まれても踏まれても葉は伸びて、花をつける。

堇を植えている人を最近あまりみかけない。ヒヨウモンチョウというオレンジ色の蝶が堇

の葉に必ず卵を産みに来る。その幼虫が、少しグロテスクな格好をしているため、嫌って、堇を栽培するのははやらないのだろうか。

ただ一花咲きすみれの花を言ふこの  
夕べ我等が家のよろこび

土屋文明 自流泉



スミレ

堇が咲くとなぜあんなに嬉しいのだろうか。たったひとつの堇なら、なおさらである。日本の堇は種類が多いことでは世界一という。公園の雑草抜きで、堇だけは抜かないでほしいといつも願ってしまふ。

すみれのこと尋ねむ人もなくなりては  
びこる五六種類ただち分ちなし

土屋文明 青南後集

文明は、宮地数千木というスミレ博士と親交があり、さまざまな種類の堇を見分けて、歌を残している。これは数千木が亡くなってから詠んだ歌。

春の野にすみれ摘みにと来しわれぞ野  
をなつかしみ一夜寝にける

山部赤人 万葉集 一四二四

まだアスファルトもなく、電線もなく、もちろん車など走っていなかった万葉時代の野。そこに咲いていた花、風は今よりもっとひとに近かった。現代ではこんな歌はちよつと作れない。ひとと花の間に距離がある。それが作品にあらわれている。